

第4章. 9.11 同時多発テロ発生後の光景

同時テロから1週間くらいは全く取材にならなかった。それまでのアポイントは軒並みキャンセル。運良く生き残ったアボも、取材に行くと本人はひどい落ち込みようで、友人から頻繁にかかってくる安否確認の電話などで取材にならなかった。よく聞かれることだが、同時テロを起こしたアルカイダはホワイトハウスを狙わなかったのか、と。結論から言えば狙わなかったのだと思う。自分も疑問に思っていたのでペンタゴンの関係者に聞いてみると、「オフィスのビルの屋上に上がってみればわかる」とだけ言われた。ホワイトハウスに近いビルは勝手に屋上に上がることはできない。スナイパーに大統領を狙われる危険性があるからで、事前に大統領警護のシークレット・サービスの許可を取らなくてはならない。屋上に上げられるチャンスは意外に早くやって来た。テレビのアンテナの調子が悪くなり、修理する必要があるのだ。私もこれに便乗することにした。

屋上に上がってみると、3階建ての“小さなホワイトハウス”を取り囲むように13階建ての連邦庁舎ビルなどが建っている。DC内は高さ制限があり、おおむね13階建てより高いビルは建てられないようになっている。ほとんどのビルは高さ制限一杯の13階建てにしているので、ホワイトハウスは13階建てのビルに周囲をぐるりと守られている格好になる。市内の何カ所かに設置されているはずの地对空ミサイルを避けるためには、テロリストはできるだけ低空飛行で飛び続け、ホワイトハウスの直前で急上昇し、すぐに急降下しなければ目的を達成することはできない。アルカイダのテロリストが取得した飛行ライセンスはセスナなどの軽飛行機の運転用であり、テロで使った大型旅客機は全く想定外である。テロの実行部隊の幹部は難しいホワイトハウスの代わりに、狙いやすい高台にある連邦議事堂を新たなターゲットにしたい、とテロの首謀者のオサマ・ビン・ラディンに許可を求めたと言われる。結局、キャピタル・ヒルを狙った旅客機は搭乗者の勇気ある行動でペンシルバニア州に自ら墜落し、テロは未然に食い止められたのだった。

そしてもう一つ忘れられない光景がある。9.11から数ヵ月経ったある日、ワシントンDCから車でNYのグラウンド・ゼロに向かった。マンハッタンに着いてから車をホテルに止め、地下鉄でワールド・トレード・センターの跡地を目指した。地下鉄は途中で不通になっており、最後は徒歩で向かった。途中、建物と建物の間の細い通りに、無数の小さな看板のようなものが地面に縦一列に建っていることに気づいた。かがんで読むとマッチ箱大の紙に書かれていたのは「写真を撮るな。ここは観光地ではない」という言葉だった。小さな看板に導かれるように小道を下っていくと、夕闇に黒々と浮かび上がったグラウンド・ゼロがあった。真ん中にポツカリと空いた大穴はまるで地獄の穴のようだった。その回りを取り囲むように建つボロボロのビル群は、むき出しになった鉄骨を手のようにだらりと前に下げ、

まるでビル全体がうらめしげに地獄の大穴をのぞき込む幽霊のようだった。